

オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞

とくいでいひえりかどうほしん
特定非営利活動法人 **かみえちご山里ファン倶楽部** (新潟県上越市)
やまざと
くらぶ
にいがたけんじょうえつし



■応募団体等の概要

活動年数 9年(平成14年2月にNPO法人取得)

年間の活動日数 300日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 20,000人

■PRポイント

今、全国にある集落のうち2,600集落以上が、今後10年以内か近い将来に廃村になる可能性があるといわれています。それら集落は、本来人間が生きていくために必要な知恵と技術の結晶であるはずですが、それをこれからの時代にどれだけ残していけるかは、私達の未来にとって、とても重要な課題です。そのためには、それぞれの地域がその土地が持つ自給力を見直しながら、本当の自治機能を取り戻していけるかがポイントになってくるのではないのでしょうか。

■応募の概要

かみえちご山里ファン倶楽部は、平成13年度に調査された「伝統生活技術レッドデータブック」で当たり前に行っていた技術や文化の多くが数年で消えてしまうという事実が数値で現れ、自然の荒廃だけでなく、生活技術やコミュニティまでが衰退の危機にあることが共通認識となったことが大きな機動力となり、地元80名が発起人となって平成14年度に設立。「人間が生存に必要な資源の自給を「10のまかない」とし、地域で生きるための本質的な活動が、中山間地域が抱える課題解決と新たなコミュニティ創造に繋がると考え、地域内で起こることや課題全てを活動の対象に、基本理念である「山里の自然、環境、文化、地域産業を『守る・深める・創造する』」の精神で取り組んでいる。現在8名のスタッフがおり、年間40~50程度の地域行事や共同作業への参加とその様子の調査や記録、年間を通じて環境教育施設や水源森林公園の運営管理等を行うほか、環境教育事業、登山道整備・林道整備・市道除雪事業等の地域振興にかかる事業も受託している。平成16年度からインターンシップの受入れを始め、これまで60名以上の学生が



訪れている。資源の余剰を活用した小規模で多様な手仕事産業の創出を行うさまざまな事業を展開し、その中でも、NPOが借り受けた放棄田で地元講師から米作りの技術を学ぶ棚田事業(「棚田学校」「有縁の米」)には、市街地や首都圏から年間延べ200名程度が参加。また年間を通じて古民家の改修等に取り組む「ことこと村づくり学校」では、その卒業生が学んだ技術を活かし、自分で家を建て移り住む計画を進める人も出てきている。子ども向け環境教育・生存教育事業では、「自然と折り合いをつけて生きる作法」を学ぶコンセプトにプログラムを開発。その暮らしを生きた形で伝えるため地域住民が先生となり、スタッフはその技術や文化の通訳者として動けるように専門知識の習得とトレーニングを行っている。これこそが日本の環境教育の形として発信し、運営する2施設をあわせて小・中学校を中心に、年間1万人以上が訪れるなど高い評価を得ている。その他にも、伝統行事再現事業(「横畑集落伝統行事『馬』」「里の結婚式等)、「村に一流を」文化事業(「月満夜の神楽」「高橋竹山コンサート」等)など、生存技能や地域文化を学ぶ場として企画し、収益が地域コミュニティの維持に還元できる仕組みになるよう取り組んでいる。NPOの活動を支える人々や連携団体は多岐にわたり、毎年講師や調査等で協力を得る地域の方は100名程度、地域行事、作業に関しては、町内会、地域協議会、青年団などの地域団体と連携が欠かせず、文化活動や商品開発は、地元生産組合、神社組合、小・中学校等との協力で成り立っている。



オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞

のうぎょうせいさんほうじん

かぶ しき がい しゃ しん しゅう

むら

農業生産法人

株式会社信州せいしゅん村

ながの けんこうえだし
(長野県上田市)



■応募団体等の概要

活動年数 2年(前身活動13年)

年間の活動日数 365日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 5,000人

■PRコメント

ありのままの農村の暮らしの中に受け入れる、日帰り型農村生活体験「ほっとステイ」を提供しています。あらかじめ決められた体験内容ではない、家庭のその日その日の暮らしの中で迎え入れをして、一緒に過ごし、家の人や田畑での米野菜たち、そして山や川の自然にふれあって頂き、農村の持っている癒され感の価値を認めて貰い、農村の存在意義を共有して頂くことを目的に運営しています。

規約には【信州「せいしゅん村」は21世紀型農村(環境保全と景観保全)の先達として、農村と都市の人々が力を合わせ日本

のかけがえのない田舎を守るために、日本の農村活用のモデル農村『人生復活の里&ヒーリングの里』として位置づけ、人々と交流を重ねる中で参加者相互の研鑽により農業・農村の理想郷を目指し、人々の青春賛歌およびふるさととの発展に資する】とうたっています。

■応募の概要

信州せいしゅん村は地域住民が運営主体となり、行政からの財政的な支援を受けずに『前例のないことを独創的に』と様々なアイデアで農村と都市の交流事業を展開。モットーは【共に野山を遊び、祭りに加わり、大地を耕す】で、常に来た人と一緒になって遊び働き、50・100年後の農村の中山間地農村の存続を願って、都市住民の方々に来てもらうことで成り立つ『サービス提供型農村』を目指しています。交流を進めるには、美しい農村景観や環境の維持が必要であるとの認識のもと、荒廃農地の解消・再生を積極的に取り組んでおり、荒れた桑園の復畑に希望者を募り、「せいしゅん村開拓団」を結成し、8反分を開墾し蕎麦を育て、そば道場も開催。食の風物詩「寒さらし蕎麦」の商品化で蕎麦焼酎を製造特許申請するなど、商品開発・販売に繋げている。移住希望者にはふるさと回帰予備校を開講し、農業や農村の現状等の本音から、移住の手順や準備、体験談や失敗談、地域との付き合い方等を詳しく手ほどきを行っている。

2006年からは「ほっとステイ」参加者へのアンケート調



査結果から「癒され感」の数値化を計り、信州大学感性工学科の協力のもと、農村体験には「癒され感」を向上させる効果があることを実証。この癒し効果を「農村セラピー」と呼び、アンケート数値は『生き方満足度』なので、この数値を『セラッチ』と呼称し、ネット上で体験のビフォーアフターを計測できるシステムを立ち上げ、『セラッチ』を活用して更なる農村振興を図ることを目指し、長野県の支援のもと、県下全域に呼びかけて、農村セラピー協会の設立を行った。

「ほっとステイ」には海外からの訪問者数も増加しており『国際青少年交流農村・宣言』を行い、アジア諸国等から2010年は1,021人が訪れた。またイオン労働組合が定期的に訪れたり、東京の楽団員約30人が訪れて、施設訪問や無料コンサートを開催する等の新たな交流も生まれている。これまでの来訪者数は延べ40,000人を超え、「人々に来てもらうことで成り立つ農村」としての自信も生まれ、受入れ家庭数は延べ121軒、常時受入れが可能な家庭は60軒を超えている。「ほっとステイ」の受入れ組織(民間)が長野県下7地区の市町村に広がり、「長野県ほっとステイ協会」を組織化し、年間11,000人以上を受入れ、周辺地域の活性化にも寄与している。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞 講評

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞は、I・Uターン等により農山漁村地域に定住し、魅力的なライフスタイルを営む方々の生き方を広く紹介することで、農山漁村地域へ行ってみたい、住んでみたいと思う方への参考となることを目的としています。

また生まれ育った故郷で、地域づくりに携わりたい、子ども達に食や自然の大切さを伝えたい、自分の作る生産物を直接消費者に届けたい等の思いから、農林漁業体験の提供や農家民宿、環境学習の受入などに取り組む方々も多くおられ、農山漁村地域の魅力を高めることで、都市と農山漁村の行き来が活発になり、それが地域の刺激となって、ゆくゆくは交流から定住へと繋がることが大いに期待されます。

今年度も、応募者それぞれの思いや考えが発揮出来る場所として農山漁村地域を選び、その土地に愛着をもち、地域に溶け込みながらアイデアと信念を持った行動力で、自身のライフスタイルを実現されている方、地元を愛し自らが地域のリーダーとなって、率先して都市農山漁村交流を実践する方等から応募を頂き、どれも、農山漁村にへの定住を考える方々、農山漁村地域でチャレンジしてみたい若い世代、また、都市との交流を実践してみたい方々の参考となる情報ばかりで、絞り込みを行うのは大変難しく難航しましたが、審査委員会では、審査基準(*)をもとに、厳正なる審査を行いました。

結果としては、築250年の古民家を改修した「ふれあい交流館一味同心塾」を拠点に、食の根幹を見直す活動をライフワークにしながら、1年の半分以上を奥出雲町で過ごし、消費者との交流や食育などに精力的に取り組む中村成子さん(島根県)、車椅子の生活を余儀なくされながらも、自分にできることを探して、あったか村の建設、農家民宿の経営、定住アドバイザーなど、地域づくり全般にわたって、リーダーとして仕掛け人として積極的に関わって活躍する白松博之さん(山口県)が選ばれました。ライフスタイル賞に選ばれた方々の生き方や活動の紹介が、新たなライフスタイルが生まれるきっかけに繋がるものと期待しております。

今回、選定にはならなかったものの、農山漁村地域に移住・定住してご活躍される方々、また都市農山漁村交流を実践される方々におかれましては、その魅力あるライフスタイルの実現までのご努力に深く敬意を表しますとともに、ますますのご活躍を祈念しております。

またぜひ、これから実現するライフスタイルをご紹介下さい。心よりお待ちしております。

平成23年3月9日
オーライ!ニッポン大賞審査委員会
会長 安田 喜憲

(*) ライフスタイル賞 審査基準

- ・独自性 (農山漁村を舞台にした新たなライフスタイルをすごしているか)
- ・モデル性 (他の人の参考・手本となるモデル的要素があるか)
- ・魅力性 (個性的で魅力やバイタリティのあるライフスタイルであるか)
- ・継続性 (無理なく長期的に続けられるライフスタイルであるか)

なか むら しげ こ
中村 成子さん

しまねけんおくいずもちょう
(島根県奥出雲町)



■PRコメント

中国山地の美しい山並みにかこまれた島根県仁多郡奥出雲町。その奥出雲町の手つかずの自然の素晴らしさに心を奪われ、その環境を守りたいと料理研究家の中村成子先生が命と自然の大切さと向き合い、米作りを通じて交流の架け橋に、2001年6月から奥出雲町ふれあい交流館「一味同心塾」館長に就任、農村交流や料理教室の開催、仁多米の全国ブランド化などの活動を展開している。地域住民とともに、ボランティアによる「米づくり委員会」を立ち上げ、昔ながらの米づくりを実践することにより、奥出雲の豊かな地域資源や地元の伝統文化の素晴らしさを再認識するとともに、体験交流の場として町内外に発信し、消費者と生産者、都市と農村をつなぐふれあい交流を実践している。生活の原点は「農」と「食」であり、その「農」と「食」の文化を大切にしたいという中村先生の情熱が、

静かな池に小さな石が落ちた時の波紋のように、10年という歳月をかけて少しずつ広がった結果、地域が忘れかけていた「農」と「食」の文化への誇りを復活させ、感動を生み、またその感動が都市との交流人口の拡大へつながり、全国に認められる仁多米の里へと成長した。

■応募の概要

中村成子さんは東京都出身。主婦の目線で作ったおやつが注目され、1987年に出版した「お弁当絵日記1000日」がベストセラーとなり、以降は料理研究家として活躍。「始末の心」を大切に素材の味を引き出し、ぬくもりある家庭料理を伝えている。中村さんが奥出雲町に出会ったのは、1999年に知人から届いた仁多米の素晴らしさを知ったことに始まる。奥出雲を訪れると、美しい里山に広がる棚田には豊かな土壌と水、そして日中の寒暖の差など、米作りの最高の条件が揃い、牛の堆肥で土を作り、収穫した稲穂は竹竿で組む「はぜ」で天日干しするという日本の食の原点が残っていた。2001年に築250年の古民家を改修し「ふれあい交流館一味同心塾」を開館。当初から館長に就任し、食の根幹を見直す活動をライフワークにしながら、1年の半分以上を奥出雲町で過ごしている。33アールの自然農法の実践田では、地元農家で米づくり委員会を立ち上げ、無農薬による昔ながらの仁多米づくりを実践・伝承し、「稲のはな」と銘名して支援者に届けている。この米づくりは



農業体験の場にも活用され、田植え、稲刈り、収穫祭には東京を始め、関西や近畿、海外からも参加者が集まってくる。その他、農産加工グループへの地元食材による調理やお弁当づくり、一般料理講習による地域特産品活用の指導など、一味同心塾は地域の食の活動拠点にもなっている。開館当時から地元小学校高学年を対象に課外教室として料理教室を開催し、自然の素材の味を伝え、生きるための食の美味しさと楽しさを共に学んでいる。また2004年からは、山の環境は海と密接な関係にあることから、隠岐海士町の「食の学校」と塩や梅干し作りを通じて総合交流を始めるなど、現在は活動10年目を迎え、米づくり委員会を中心に新しいコミュニティが生まれ、同時に仁多米のブランド化の推進する流れの中で、米や農産物と地域間の交流を担っている。命と自然の大切さと向き合いながら、地域の原点である農と食を通じて、中山間地域の文化や暮らしの価値を発信している。

しら まつ ひろ ゆき
白松 博之さん

やまぐちけん あ ぶちよう
(山口県阿武町)



■PRコメント

白松博之さんは、山口県阿武町において35年にわたり都市と農山漁村の交流に取り組み、平成17年には念願の農家民宿を開業。特に地域を巻き込んだ滞在型のツーリズムの推進に尽くし、阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の会長として、子ども農山漁村交流プロジェクトや外国人の受入(JICA研修など)、まちとの交流と環境に配慮した田舎暮らしを提案するための「あったか村」設立、更には定住促進などに力を注いでいる。忙しい日々が続くが、「地域のために」この言葉を原動力に常に新しい取組に挑戦している。

■応募の概要

白松博之さんは、長く林業を営むとともにキノコ狩りや山菜狩り、都市に向くイベント等も手がけ、野菜の生産も地域でも1番を誇る中、1998年に高所で枝打ち作業中に転落事故に遭い、車椅子での生活を余儀なくされた。そこから白松さんの「出来ること探し」の挑戦が始まり、まず過疎化した地区の山林を買い取り、農地や宅地を借り上げて「あったか村」を建設。町内の間伐材、塗装は柿渋を使い、誰もが安心して過ごせる場所を目指し、現在も進行中。2005年には、念願の農家民宿「樵屋」を開業し、地域資源を活かした体験交流プログラムや自家製が中心の料理の提供、なにより白松夫妻の気さくな人柄から人気の宿となっている。民宿開業を機に、より地域活性化効果(経済効果+生きがい効果)の高い滞在型・通年型の交流を目指し、子ども農山漁村交流プロジェクトの受入協議会の会長として、コーディネートから受入先の確保まで自ら率先して取り組み、JICA研修などの外国人の受入も地域ぐるみで実践している。滞在型の交流を契機に、様々な情報やネットワークが構築され、町への活気へ繋がり、新しいこ



とのチャレンジも増えている。また月に1家族程度が移住するなど定住の流れも生まれ、町の定住アドバイザーとしても活躍している。自身のホームページや自動車会社が運営する交流情報サイトにブログを開設して情報発信を行うなど、地域づくり全般にわたって、リーダーとして仕掛け人として積極的に関わっている。田舎には探せば必ず宝物がある。地域の人が田舎の魅力に気づいてプラス思考になった時、どんな田舎でも何か素晴らしいことが起こるのではないかと、その信念で活動を続けている。ともに頑張っている妻の紀志子さんは、平成20年に農林漁家民宿おかあさん100選に認定された。転落事故のあと、寝返りを打つことから始まった「出来ること探し」は、地域に幾つもの輪をつくり、大きなうねりとなっている。現在は、阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会を自立的・継続的に運営するため、社員研修、ワーキングホリデー、大学生のインターン等、ターゲットの幅を広げての受入体制の整備やNPO法人化も検討するなど、更に活動を発展させるための体制づくりに取り組んでいる。



オーライ！ニッポン大賞 審査委員

会長 安田 喜憲	国際日本文化研究センター教授、オーライ！ニッポン会議副代表	(敬称略)
井上 和衛	明治大学名誉教授	
岡島 成行	公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長	
柴田 耕介	社団法人日本旅行業協会 理事長	
長岡 杏子	TBS アナウンサー	
平野 啓子	語り部、大阪芸術大学放送学科教授 オーライ！ニッポン会議副代表	
松本 零士	社団法人中央青少年団体連絡協議会 会長	
元石 一雄	公益財団法人日本生産性本部 常勤顧問	

オーライ！ニッポン大賞 概要

●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行っており、交流の拡大、活性化に寄与した団体・個人や、都市と農山漁村双方の生活、文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

●表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

都市と農山漁村の共生・対流を促進するため、「都市から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等について優れた貢献のあった団体もしくは個人。

(1) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞） 1件

*下記オーライ！ニッポン大賞と、連携する表彰事業から推薦される「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」の事例から1件が選ばれます。

オーライ！ニッポン大賞 4件程度
審査委員長賞 数件

(2) 審査の基準

- ・新規性（新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること）
- ・継続性（活動に多様な主体が参加・連携し、継続的な活動実績があるか）
- ・モデル性（他地域への波及効果が期待できるか）
- ・独自性（地域固有の資源や個性を十分に活用し、オリジナリティがあるか）
- ・効果性（経済効果・社会的効果等が生まれており、持続して発現すると見込まれるか）

ライフスタイル賞

1ターンの等により農山漁村において個性的で魅力的な新しいライフスタイルを実践している個人。

(1) 表彰の種類

オーライ！ニッポンライフスタイル賞 数件

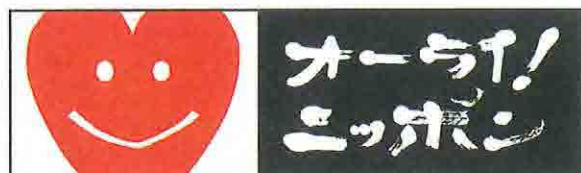
(2) 審査の基準

- ・独自性（農山漁村を舞台にした新たなライフスタイルをすでにしていること）
- ・モデル性（他の人の参考・手本となるモデル的要素があること）
- ・魅力性（個性的で魅力やバイタリティのあるライフスタイルであること）
- ・継続性（無理なく長期的に続けられるライフスタイルであること）

オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞・フレンドシップ賞

表彰事業及び表彰対象において、本表彰事業（オーライ！ニッポン大賞）の趣旨と共通点を多く有すると思われる表彰事業を実施する民間企業、団体等の事業主体と連携を図り、その連携する表彰事業からご推薦頂く事例において、「オーライ！ニッポン大賞」の趣旨に合致する事例を「オーライ！ニッポン フレンドシップ賞」（以下、フレンドシップ賞）に選びます。

フレンドシップ賞の中から、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）の候補となる事例を審査委員会において選定し、「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」として表彰するとともに、「オーライ！ニッポン大賞」に選定された事例と併せて、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）を選定いたします。



主催：オーライ！ニッポン会議、農林水産省

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、
社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

オーライ！ニッポン大賞 事務局

オーライ！ニッポン会議

TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5221

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階
ホームページ <http://www.ohrai.jp>
E-mail : info@ohrai.jp